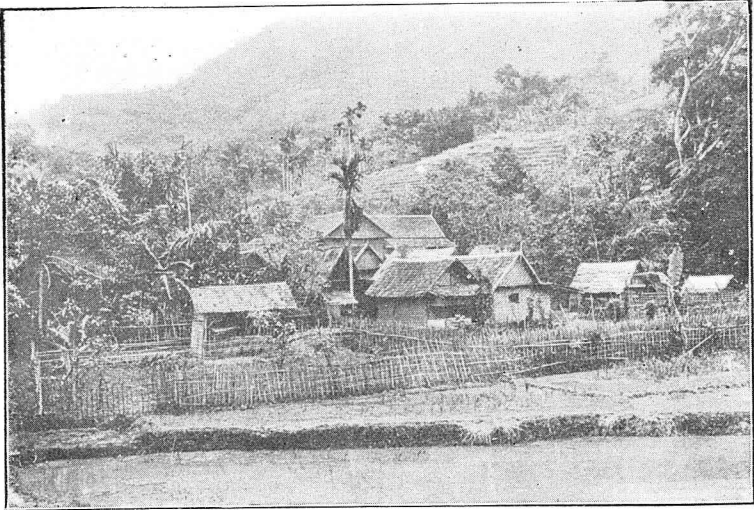


瓜
哇
の
村
落

と

セ
レ
ベ
ス
の
村
落



爪哇の氣候と住民の生活

文學士 石 橋 五 郎

氣候が住民の生活に與ふる影響の大なることは古く既に希臘のヒポクラテスの唱へた所であるが最近米國エール大學のハンチングトン氏も本誌前々號に原博士の紹介せられし如く、「文明と氣候」なる新著を公にして再び此問題を提起し、其の序文の冒頭に、此書こそ新地理學の産物なれと言つて居る。最も古き此の問題が、最も新しき地理學の研究題目となつたのを見ても如何に之が地理學殊に人文地理學上重要であるかが判る。予は去夏數月間南洋に遊び稍久しく爪哇に淹留せしかば、此問題に就て聊か注意する所があつた。左に記すのは其の觀察の一端である。

爪哇は南緯約六度より同八度の間に位する東西

に長き島嶼であるから、其の氣候の熱帶的なること言ふ迄もないが、熱帶中に於ても爪哇は其の最も代表的のものである。即ちバタビアに於て暑期（七月乃至十月）の平均溫度は華氏七十九度、五なるに、冷氣（一月及び二月）の夫は七十七度四にして其差僅かに二度に過ぎぬ。年中に於て斯く溫度の差少なきに、一日中に於ても室内にては、日中夜半餘り著しい變化がない。爪哇は眞の意味に於ける常夏の國である。加ふる濕氣甚だ多く、島の大部分は三千乃至四千耗の雨量を有し、最大雨量の地は七千耗に達する乾燥期と雨期との別あれども、亞熱帶の夫の如く顯著でなく、予は乾燥期に旅行せしも、屢々豪雨に出遇つた。又島は貿易風

帯にあれば、風は頗る微弱にして、暴風の襲來は殆んど絶無である。尤も此の氣候的關係は爪哇の如き山岳に富む國に在りては、土地の高低により幾分の變化あることは免れぬ。然し爪哇島の面積七割二分は六百五十米以下の低地にて、大跡上述の氣候によりて支配せられて居る。此の特種の氣候は爪哇の住民の上に亦特種の影響を與へて居ることは言ふ迄もなきことにして、爪哇が經濟的に大發展をなしたるは、一は之を支配する和蘭人の努力の賜であるとは云へ、其根柢は此の氣候的關係にありと云ふを憚らない。

現今の爪哇の住民は土人、白人、支那人、アラビヤ人等が重なる者であつて、千九百五年のセンサスに據れば、其總數(爪哇の外マヅラ島を加ふ)約三千萬人である。中土人は二千九百七十萬にして、白人は六萬五千、支那人は二十九萬五千であ

る。以下述ぶる住民の生活なるものは、主に土人と之を支配する白人の生活に就てある。

先づ種族的生活に於ける氣候の影響を考ふるに現住の爪哇の土人は三大種族に分たれる。一は爪哇平地の大部分に住む爪哇人(Javanese)であつて二は西部の山上に住むスンダ人(Sundanese)、三はマヅラ島及東部爪哇に住むマヅラ人(Madurese)である。此等三者は元同一の馬來種より出でたるものなれど、其住地の特色により多少其種族の特色を異にするに至つた。其中著しきものはスンダ人が爪哇人に比して、身長高く強健にして活氣を有することである。惟ふにスンダ人は氣候比較的清冷なるブレアンデル地方に住むを以て、海岸平地の住民に比し、此の如き差を生じたるには非ざるか。由來温帯地方にては食物等の關係上、海岸地方の住民は山岳地方の住民に比して身長躰格大

なるを普通とするに、熱帯地方にては主として氣候的關係によりて、此の如き結果となりしと信ずる。

次に白人が氣候から受けた種族的影響と見るべきものは、爪哇に蘭人のハーフカスト(Half cast)の増加である。氣候の暑き地方にては情慾の念熾となるは周知の事實である。爪哇の蘭人は土人を賤し其語を學ぶさへ避くるに、土人の婦人に對しては寛大であつて、之と婚する者尠くない。

最近英人キアンベルの著したる爪哇と題せる書(D. M. Canbell, Java 第二卷一〇三四—四七頁)

には、第十九世紀の前半蘭人の爪哇第二統治の初頃(一八一六年乃至一八四六年)、パタビアに於ける白人の出生兒の統計を掲げて居る。即ち左の如し。

西 純私生兒(大部分
 嫡出兒(兒(認知せられたるもの)
 混血兒ならん)

西	純私生兒(大部分 嫡出兒(兒(認知せられたるもの) 混血兒ならん)
一八二九	一四九
一八三〇	二〇
一八三一	一〇六
一八三二	一二三
一八三三	一二六
一八三四	一一三
一八三五	一三八
一八三六	一四一
右合計 二〇一六	三二二
「備考」白人間の嫡出兒一、〇一六に對し混血兒は下段二の和なる約四二三なる故其比は大凡二・五と一なり。	一一一
西 純私生兒(大部分 嫡出兒(兒(認知せられたるもの) 混血兒ならん)	純私生兒(大部分 嫡出兒(兒(認知せられたるもの) 混血兒ならん)
一八三七	二二四
一八三八	一一七
一八三九	一二七
一八四〇	一四二
一八四一	一二六
一八四二	一二三
一八四三	一一三
一八四四	一三二
七四	一五
四六	三
三九	七
二九	一七
二五	二一
二三	二二
二九	一八
四七	八
六二	五
四九	三
六〇	七
四九	五
七一	一
六五	七
四六	二
五三	五

一八四五	一四二	五六	七
一八四六	一〇九	五五	九
右合計	二二五五	五六六	五一

〔備考〕白人間の嫡出兒一、二五五に對し混血兒は下段二の和なる約六一七なる故其比は大凡二と一なり。

右に據ると、當時純白人間の生子二人若くは二人半に對し白人と土人との混血兒即ちハーフカストは一人の割にて生れた事實が知れる。而して此のハーフカストは、其當時から既に社會上非常の迫害を受けたにも拘らず、かく多數の出生を見るは恐くは爪哇の氣候が蘭人の情慾を刺激した爲めには非ざるか。ハンチングトン氏は上述の書中（四六一四七頁）に於て、白人が熱帶地方に在りて半裸體の婦人を見ることによりて、肉感を挑發し、之れが爲め墮落する類例を擧げて居る。尤も此の關係は唯り白人のみならず土人に於ても同様であつて、爪哇の土人が一八一五年に僅か四百五十九

萬人であつたのに（キャンベル第二卷一〇六〇頁）一九〇五年には約三千萬人に増加したのは、和蘭の植民政策の良好なりし結果とは云へ、一は此の氣候的關係に基く土人の増殖力の強大なる爲めであらう。

何れにしても爪哇にては斯くの如くにしてハーフカスト逐年増加し、現今バタビアにては彼等は白人と離れて一區劃内に住し、白人に拮抗し白人は又之を冷過し、兩者間の反目は爪哇に於ける重要な社會問題の一である。

尙ほ此他人口動態上氣候の影響としては、他の熱帶地方と同じく結婚が弱年に行はるゝことであつて、通常男子は十五六才女子は十二三才で結婚する。而して何れも多産であるが、瘡瘡其他の流行病にて死する者多く、早婚の割には子女は餘り多くない。唯注意すべきは、一般の死亡生産が我

國の如くに季節により著しく差異なきことである。我國にては出生率は一月乃至三月の交最も多く、死亡率は一月及び八月に於て最も多きも、爪哇にては各月の出生死亡其率に著しき差がない、之は恐くは氣候が上述の如く年中變化少なきことが主因と思はれる。

次に爪哇に於ける土人及び白人の衣食住の上に於て氣候的影響の注意すべきものを擧ぐれば左の如くである。

爪哇土人の衣服は上部を裸體若くは半裸體となすも腹部及び脚部は男女共必ず下着を着け、其上に木綿製の Sarong を着す、頭部は又布帛 (Kain) を以て包むも足部は必ず徒跣である、此の足部を露出することは爪哇の如き氣候に在りては生理上必然の要求である如く、白人等も家居の場合には多くは徒跣であつて僅かに輕き上履を履くに過ぎな

い、之は云ふ迄もなく足部の充血する爲めにして予も屢々其難を覺わたり、此に於て爪哇の白人の家には獨特の大椅子(土人の所謂 Kurai Besar) 案出せられ、椅子の前に腕木を出し、其木上に足を投げ出すのである、我が國俗が古來椅子を用ゐず床の上に坐するは類似の氣候的關係からと信ずる。尙ほ爪哇にては温熱を凌ぐ方法として毎日數回水浴 (Mandi) をなす風あり、或は水邊に出で或は浴場にて之を行ふ、一度之を見れば我古代風俗の禊は此の種の風俗を轉化せしものに非ざるかを思はしむるのである。

爪哇土人の食物は日に通常二回にして米を主食とし食慾を刺激する爲め固有の香辛料を加味す、此の種の食物は爪哇の氣候には最も適當せる故を以て蘭人等も之に倣ひ、所謂米料理 (Rijstadeel) を食ふ、其食量は土人の一日の米の分量約一封度

四分一なりと云へば我國人よりは稍少なきが如く思はる、反之飲料は頗る多量にして多くは水である、酒を用ふるものは少なく假令用ゐても麥酒の如き淡泊のものである、水は食卓は勿論執務時間中も絶えず大杯を側に置き之を飲用す、此の水を多量に攝取することは疑もなく熱帯の氣候に堪ゆる一條件にして往年獨逸のゴツポ博士は南米の牛を歐洲の夫と比較し其肉中に在る水分の著しく異なるを知り、之を以て動物が熱帯の氣候に馴化する一條件なりと論せしが正しく其の然るべきを首肯せしめた。

更に爪哇の家屋を見るに普通土人の家屋は柱に竹或は木を用ゐ、屋根はNipa椰子にて葺くものもあれども多くはラテライト(Laterite)製の瓦である、此の瓦の極めて薄きは此地方の無風の賜なるべし、家の四壁は竹を編みたるものを用ふるも窓

は極めて小なり、光線の入るを防ぐ爲めならん、而して室内にて炊事をなすも煙出しなく煙をして室内に充滿せしめ之を以て驅蚊の一法として居る煙の利用が朝鮮の温突と異なる點は面白く感じた家屋の構造は概ね三棟より成る、第一棟は最も前面に在りPantoloと云ひ普通の訪問客を請する室である。予が見たるはジオクジャ市の一大官の家なりしが此のバンドボの大きは約我が二十疊敷程もあつた、次の棟はPrinsian云ひ定泊客の爲めの座敷なり。而して最も奥まりたる棟はOetanと云ひ即ち家人の住居である、然るに此の三棟は互に廊下にて結び付けらるゝが其様甚だよく我神社の構造と相似たるを感じた。

而して爪哇家屋の構造が著しく他の南洋諸島の夫と異なるは其の床の構造である、南洋諸島の民家は多くは彼の杣上家屋にして床の高さ四尺乃至七

尺はあるに爪哇の夫は全く式を異にして床は唯一二尺高めたるものにて我國の家の如し、其異なるは土を叩き堅め之を以て床としたることである。

斯く爪哇の床の構造の異なる理由に就ては佛人 Cabaton の著せざる *Les Indes Néerlandaises* に據れば中世のヒンドスタンの文化の影響なりと云ふことである。蓋し事實であらう、爪哇人の家の古式は棧上家屋であつた事は今彼等の邸内の祠堂には此の式を用ふること、山上に生活して古俗を存するスンダ人が尙ほ此の式の家屋に住すること知られる、由是觀之材上の家屋なるものは元水交通の利便より來りし式にして、爪哇以外の南洋諸島民は一は未だ水上生活すること遠からざること一はヒンドスタンの文明の影響を受くること少なき爲めに假令内地に住しても尙ほ其古俗を守るに過ぎず、反之爪哇人は既に水上生活を棄て、陸上に

本據を置きし故其建築法を變化せしものなるべしと感じた。

次に爪哇の村落 (*Kampung*) の形の上にも勿論氣候的印象を認むることが出来る、即ち彼地の村落は一般に散村式にして、一村の人口約三十人乃至五百人に過ぎぬ、而して村落を構成する民家は概ね椰子其他の樹陰に作られ遠望すれば村落は一の森と見ゆる程なり、村落の區劃は截然とは作られざるも或る村落は竹の網代によりて屋敷を區劃し此等が相連りて自然一區劃をなすのである、此の如き村落は稍々密集式にて予は此種の村落を著名なる佛蹟ポロブドールの附近に認めた、此附近は印度文明の最もよく浸染したる地方故或は此種の村落制は外國文化の影響やも知れず、又各村落及び都市を通じて特殊の形を作り、又之が氣候的影響と見るべきものはアルーンアルーン (*Alouna*)

(三)の制である、之は都市或は村落の畧中央に在る廣場であつて多くは大樹あり其樹陰に或は市場を開き、或は住民行樂の巷となるのである、其様歐洲のマーケットに酷似するも恐くは自然に發達したるものであらう。

更に一般經濟生活と氣候との關係を見るに爪哇の暖溫なる氣候は天産を豊富ならしめ、住民は所謂奪取經濟 (Raubwirtschaft) にのみ依頼し得れども氣候上の天恵は彼等に農業を勸むる、即ち多雨なる爲めに岩石の靈爛を促進し火山噴出物の如きも容易に肥沃なる土壤と化する。其結果火山の頂も耕地となすことが出来る、中央爪哇に於ては此等火山が相並んで何れも圓錐の頂迄耕地の線條にて飾られたるは一の奇觀である、而して又其裾野は甘蔗の耕作に適し、爪哇の甘蔗畑は環狀をなして火山の麓を圍繞して居るのである。

此の如くであるから住民の生活は頗る容易であつて従つて一夫多妻の風が宗教の禁する所にも拘はらず發達する、キャンベルの記す所によれば爪哇の男子が妻妾を養ふ費用は一ヶ月三ルピー (我二圓四十錢) にて足ると云ふ、されば其生兒の養育も頗る廉であつて土人は子生れても之を生活上の羈絆と考ふるもの一人もなしと云ふのを見ても如何に其經濟生活か容易なるかが判る。

最後に爪哇の氣候と土民の文化との關係並に白人の爪哇に於ける氣候馴化との關係を述べて見たいと思ふ、爪哇の土人は恐くは現今同緯度に在る熱帶地方の土人中最もよく文化し少くとも最も文明を理解する者と云つてよからう、是れ一は蘭人訓練の然らしむる所とは云へ一は爪哇人が比較的的文化する素質ある爲めではあるまいか、歐洲の學者等は熱帶の土人が皆氣候的影響により勞働心

を喪失し懶惰なりと説けども、予の視察によれば爪哇人には他の文化國民と同じく勞働の正當なる報酬あれば喜んで働き又事情が許せば學術をも學び得るものなりと思はしめた、一八三〇年以來爪哇の總督となりし Van den Bosch の勗めたる強制耕作制自身は土人の勞働に對し正當なる報酬を與へなかつたが之が廢せられた後の爪哇は確に其分配が大に公平となつたので之が土人の働くに至つた原因と信する、全面積の五分の四を耕地とすることは土民の自發心を除きて考ふることは出來ないのである。又爪哇人に好學の風あり其智腦あること淹留中幾多の事例によりて深く信じたのである。故に此點に於て爪哇人が氣候的關係により懶惰若くは愚蒙であると云ふことは信じないのである。

爪哇に於ける白人が從來如何に氣候に馴化せし

か將來は如何との問題は爪哇の將來に取りて重要な問題である然るに予の見聞する所にては白人の馴化力は頗る微弱である、抑も爪哇に白人が初めて指を染めしは第十六世紀の初めである。今に及んで既に四百年の歲月を経れども殆んど馴化の跡を見出さない、現今爪哇に在る蘭人の殆んど凡ては永住の念なく公職に在るものは或る富を作るまで在するを待ち實業を營むものは或る富を作るまで在住するに過ぎぬ。爪哇を墳墓の地とするものは寥々たるものである、之は必ずしも單に懷郷の念忘じ難き爲めではなく其氣候に堪わざる爲めであるキャンベルが永年の爪哇生活の實驗によれば白人爪哇がに働く年齢は二十一歳乃至三十歳迄なりと云つたのは至言と思ふ、少くとも此の年齢の間に来らざれば馴化困難である。而かも多少馴化しても働き得る極限は十年間に過ぎぬのである。而

して此氣候に對しては大人は尙ほ忍ぶべし、其出生の兒に至りては多くは生後數年内に仆るゝのであつて之れが永住をなし難き最大原因と云ふことも出来る。

斯くの如くであるから上述の如く白人の此地に來りしより四百年の歲月を經るに其現在數約七萬に過ぎず我邦人が臺灣占領後僅かに二十年にして十五萬人の内地人を數ふに比すれば其差の大なるを知る、而して此事が又爪哇以外の蘭領印度が開發せざる一原因である、米人ハルバートが最近民族の發展は須らく同緯度の方面なるべしと云へるは白人に取りては眞理と考へらる (H. B. Hubert, Japan and Isotherma Empire.—The Journal of Race Development, April 1916.)

故に爪哇に於ける白人の運命は氣候上より觀察すれば甚だ望み少なしと云ひ得べく、由て起る問如きは所謂顯はれたる偉人ならん、藤門に於ける

題は彼地に在る他の東洋諸人種の氣候に對する關係の研究であるが之は追て編を改めて論ずる積りである。

叢 說

隠れたる陽明學者—淵岡山先生

文學博士 高瀬武次郎

一、緒 言

均しく鴻儒たりし人も能く當時に知られ又能く後世に傳はれる者と、然らずして當時にも顯達せず又後世にも傳はらざる者あり、前者を顯はれたる偉人と謂へば後者を隠れたる偉人と謂つべからん今之を中江藤樹先生の門下に就きて考ふるに、淵岡山の如きは所謂隠れたる偉人にして熊澤蕃山の